アフガニスタンと北海道の市民社会のつながり

清末愛砂

二〇二五年四月末からアフガニスタンを訪ねた。二〇二一年八月のタリーバーンの復権以後三回目の訪問にあたる。憲法学に加え、

アフガニスタンの女性運動やジェンダーに基づく暴力・差別について研究してきた筆者にとつて、同国での調査は非常に重要な意味を持つ。また、一九七七年に創設された同国初の独立系フェミニスト団体RAWA（アフガニスタン女性革命協会）との連帯活動が続けてきた日本の市民団体「RAWAと連帯する会」の共同代表としてRAWAメンバーに定期的に会い、活動内容や情勢を互いに共有しつつ運動の課題を見いだすことも必須だ。

内戦（米国に対する9・11同時多発攻撃以後の米英国等による軍事攻撃で一度は敗走したが、その後には復活したタリーバーンと政府軍との争い）に陥った前政権時代に比べると、現在のアフガニスタンの治安はかなり良好だ。タリーバーンの勝利により内戦が終結し、その後は暫定政権である第二次タリーバーン政権が民衆に強い力による支配が皮肉にも功を奏した結果ともいえるだろう。中国やヨーロッパ諸国からの観光客も増えている。治安が著しく悪化した前政権時代の後半では考えられなかったが、今回の滞在では、

夜七時すぎまで同行者と中心部を散歩した日もあった。

一方、タリーバーンの復権下では女性の自由を侵害する数々の施策が継続されている。例えば、復権以降女子は七年以上の教育を基本的に受けることができなくなった。女性の就労も大幅に制限されており（小学校の教員や一部の医療職等に限定）、同国に対する経済制裁による不況の影響も受け、数多くの女性たち、特にシングルマザー世帯は極貧生活を強いられている。これらを受け、二〇二五年七月八日に国際刑事裁判所はタリーバーンの最高責任者等に逮捕状を発付した。

RAWAはこのような苛酷な状況に抗するために、特に教育に力を入れて活動をしてきた（その他、女性の権利や創設者の暗殺を追悼する集会、貧困世帯への食糧配布や被災地への移動クリニックの派遣も実施）。現地には、RAWAが運営（財政部分はRAWAと連帯する会が担う）の小学校もある。七年以上の女子を対象とする「秘密の学校」も各所で開校されている。私たちが暮らす北海道にはRAWAと連帯する会の会員が一定数いる。二〇一九年や二〇二四年にRAWAメンバーが来日した際に、室蘭や札幌でも講演会

を開催し、参加者の一部が後に会員になってくれたパターンもある。これらの会員は、セキユリティに細心の注意を払いつつ弾圧をなんとかかわし、粘り強く闘うRAWAの活動を支えている。

二〇一四年に来日したRAWAメンバーのSは、現地に到着した私たちを空港まで迎えてくれた。カールだけでなく、RAWAの拠点の一つがあるマザリーシャリーフを訪ねたときも、先に現地入りし、メンバーや秘密の学校に通う女子生徒との出会いの場となる交流会の最終準備をしてくれた。交流会に参加したメンバーの一人が優しい口調で言ったことを忘れることができない。

Sの報告書を読み、報告会にも参加して、日本に私たちを支える人々がいることを知った。手作りのジャムやケーキまで販売して、必死に寄付を集めていることを知っている。その人たちが今度は私たちを訪ねてくれた。とても嬉しい。

これを聞いた瞬間、Sが室蘭（私の学部と大学院の授業を含む）や札幌で行った講演会の様子がよみがえった。北海道ではどこよりもたくさんの講演の機会を作ったからだ。多数の参加があった。これらの来日講演は、Sだけでなく他のメンバーを力づけるものになったのだ。その効果を知ったとき、アフガニスタンと北海道の市民社会がつながったことを実感した。

へきよすえ あいさ・室蘭工業大学大学院工学研究科教授V